

# 春・夏のクチキコオロギ

山 崎 俊 道

筆者は先に、1973年10月9日より、1974年3月末日までの観察例—秋・冬のクチキコオロギ—を報告したが、本報は、それに引続くものであり、飼育と併せ行った4月以降の観察例を主として報告する。

## I. 越冬

2月を過ぎる頃ともなると、成虫の姿は野外ではほとんど見られなくなり、1個体を探すのに、かなりの労力を強いられるようになる。しかもその傾向はますます強まり、2月中頃から7月初めの約5ヶ月間にあっては、僅か数頭の幼虫を、朽木の樹皮下において観察したにすぎない。

にもかかわらず、8月後半に入る頃になると、忽然と姿を現わし、至る所でその声を聞く事になる。

その間の越冬状況、特に3月から5月までの潜伏場所などについては、不明な点が多く、更に詳しく調べる必要がある。

冬期における越冬幼虫のうち、体長15mm~18mm前後の中齢幼虫が多く観察されたが、中には2~3令と思われるような、体長5mm~9mm前後の若齢幼虫も、数頭観察された。

飼育下のもものでは、管理の不手際によるものか、3月までに成虫の大半が死に、僅か2頭が6月中頃まで生きのびたに過ぎず、それもかなり衰弱していて、産卵には、至らなかった。

しかし、幼虫を飼育越冬したものでは、途中で死亡するような事もなく、順当な発育を遂げ産卵に至ることができた。

## II. 脱皮・産卵

これまで、産卵は越冬した雌の成虫により行われるといわれていたが、今回、飼育下ではあるが、幼虫で越冬したものについても、産卵することが確認された。

この個体は、昨年10月末に三熊山より中令幼虫を採集、飼育を続けてきたもので、7月18日に雌が、22日には雄と、ほぼ同じ時期に成虫化がみられた。

飼育期間中、4回程の脱皮がみられたが、気のついた時、既に脱皮している事も多く、確かな回数はわからなかった。

野外での脱皮場面は、いまだ目撃していないが、飼育下では常に物かげにかくれて行うようで、脱皮の時は、2・3日姿を見せぬことが多い。

雄は成虫化して、しばらくすると鳴き始め、盛んに求愛行動をとるようになる。

交尾は確認できなかったが、7月30日には、はや産卵しているのがみられた。

成虫化後、12日目である。

産卵は昼間でもみられ、腹部を下方に曲げ、産卵管を土中にさしこみながら行うが、比較的浅く産下されているのが多く、地表に出ている卵もかなりみられた。

雌は、9月中頃に死亡し、産卵期間は約40日であった。

孵化時期にも、約1ヶ月以上の差がみられたことから、雌の死ぬ直前まで、産卵が行われたものと思われる。

雄も10月に入ってまもなく死亡した。

### Ⅲ 解 化

7月30日から9月中頃までに産下された卵は、9月に入って次々と孵化し、遅いのは10月中頃まで孵化がみられた。

卵は、長径2.5mm、短径0.5mmの長楕円形で、発育するにつれ次第に大型となり、透明度も増す。孵化数日前には、頭部・複眼らしきものが透視される。

やがて卵は縦に割れ、頭部より脱出する。

孵化直後の幼虫は半透明で、体長3mm、触角4.5mmと成虫の面影を伝えている。

卵の殻は食せず、幼虫はそのまま潜伏場所へ入る。

野外での産卵、孵化は、今回一度も観察する機会がなく、これらは全て、飼育下における観察だが、野外でもほぼ似たようなケースをとるものと思われる。

### Ⅳ 脱 糞

飼育という限られた場所でも、潜伏場所に糞が堆積するようなこともなく、水槽飼育のものにおいては、登れる筈のない壁面に糞が付着しているなど、これまで疑問に感じてはいたもの見過していた、脱糞の様子について、記録しておく。

まず、しばらく瞑想するような状態に入り、糞がゆっくり出てくる。やがてりきむ状態に移り、この間少し時間がかかる。

八分目程糞が出てきた時、後脚で尻を蹴りあげ、糞をかなり後方にはじきとばす。

時には、ピシッと壁面に当る音が聞える。

しかし、常にこうするとは限らず、水様の糞をすることもあり、自然に出てしまうこともある。